

遊びの精神に神髄見る

「闊歩する漱石」(丸谷才一著)

漱石にはふたつの面がある。ひとつは「吾輩は猫である」「坊っちゃん」といった滑稽(こっけい)小説を書いた漱石。もうひとつは「こころ」「明暗」などの近代的自我に悩むメランコリックな小説を書いた漱石。かつて文芸批評家の花田清輝は「猫」から「明暗」へではなく、「明暗」から「猫」へと順序を逆にして漱石を考え直すべきだといったことがある。

本書はまさにその試み。通常の漱石論と違って「こころ」や「明暗」より、「猫」や「坊っちゃん」のほうを重視する。なぜならそこには写実主義とは違った、より自由な新しい文学の型を作ろうとする創造の意欲があふれているから。

ふつう「猫」や「坊っちゃん」は漱石が手慰みで書いた遊びの小説と軽く考えがちだ。しかし、丸谷才一はその遊びの精神のなかにこそ漱石の神髄があると見る。世の常識につねに異論を立てる文芸批評家、丸谷才一の真骨頂(しんこっしょう)である。

「坊っちゃん」の面白さのひとつに、ののしり言

葉の羅列がある。例の「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被(ねこかぶり)りの、香具師(やし)の、モンガーの(略)」である。

こういう言葉の羅列(遊び)は実は「古事記」から歌舞伎にいたるまで日本文芸の伝統的手法だという。漱石は昔からある古い手法を新しくよみがえらせた。古典の再生である。

神話を使う。パロディーに興じる。引用に頼る。漱石は「猫」や「坊っちゃん」で当時のきまじめな自然主義の作家たちが考えもしなかった手法を使った。

これには理由があった。漱石がロンドンに留学していたころ、イギリスやフランスでは十九世紀の写実主義の文学にかわって、モダニズム文学が台頭し、前衛性と古典の再生(伝統の継承)によって新しい文学を作ろうとしていた。漱石はこの影響を受けたというのである。だから漱石とジョイスが同列で論じられる。実におおらかな漱石論である。(川本三郎・評論家)

(講談社・1600円) = 2000年8月31日③配信

過激に現代の核心に迫る

「だいたい、いいじゃない。」(吉本隆明、大塚英志著)

戦後五十五年、「知識人」のクレイゴトにひそむインチキをあばき、つねに同時代現象の共通文脈に目を配ってきた思想界の巨人が、吉本隆明である。若い世代には、「人気作家・吉本ばななのパパ」といったほうが早いかもしれない。

吉本は、ファッションから哲学まで、つねに自前の視点から「同時代文化」をつぶさに観察し、独自の解剖をおこなってきた。

こうした吉本のクリティックに賛同して対話を挑んだのが、「おたく」世代を代表するマンガ原作者・批評家の大塚英志。彼は青少年犯罪など社会現象と、その背後に脈打つ思想とが合流する地下水脈を追ううち、吉本にたどりついたのだ。

両者三年間の断続的討議の末、生まれたこの本。話題は、アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」の読解にはじまり、連続少女殺人犯・宮崎勤の心象風景、さきごろ自殺した江藤淳の人物評価、オウム真理教と「脳内革命」の共通点、プロレスとK1の違いなど多岐にわたり、一見脈絡がない。

が、万事クレイゴトでは終わらない二人は、お互

いに得意技を繰り出しつつ、同時代現象の核心に迫ろうとする。とくに二〇〇〇年現在の文壇・論壇を毒するクレイゴト文化人(吉本が「知の三馬鹿」と呼ぶ蓮実重彦・柄谷行人・浅田彰ら)への批判はまったく痛快なまでに、歯切れよい。

導き出された結論も「知識人」言説を真っ向から論破して小気味よい。「サブカルチャーこそ、思想である」「個人消費こそ、生産である」「オウム現象や自殺マニュアルこそ、精神世界の即物化である」

こうしたパロックス状況が、今の日本で当たり前のごとく成立する点がよく納得できる。力の抜けたタイトルどおり、親子が仲良くダべするような語り口は読みやすいが、中身は過激で現代のツボを突いている。

なにより「重層的非決定」「アフリカの段階」といった難解な吉本用語群が、大塚の繰り出す多様で身近な事例と出会い、ある種の和音を奏でているのが、不思議だ。(藤本憲一・武庫川女子大助教授)

(文芸春秋・1238円) = 2000年8月31日④配信